



脳の不思議

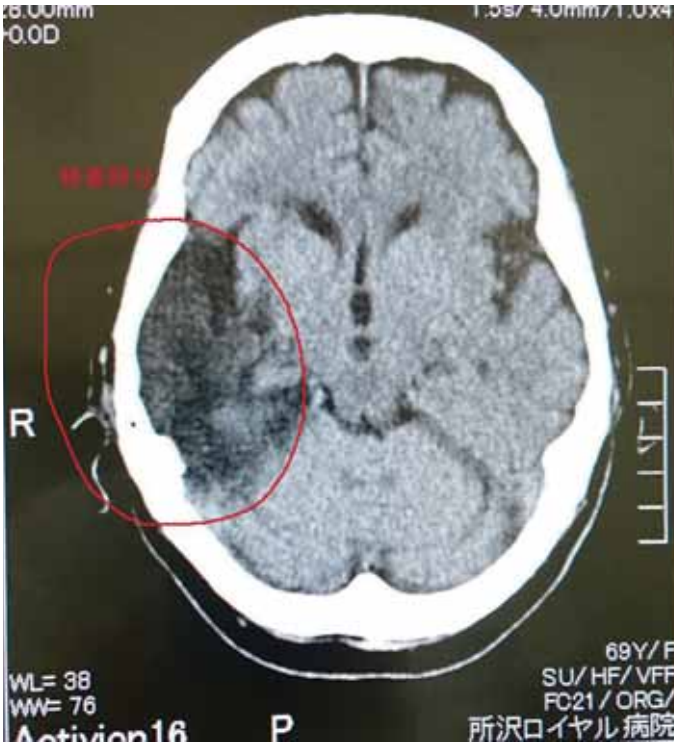
医療法人啓仁会 所沢ロイヤル病院(埼玉県所沢市)
内科部長 布施 滋

ご承知の通り、地球上の全動物の中で人間は最も脳が発達した動物です。それが人間の高度の文明や文化の基礎となり、同時に無益な紛争の元にもなっています。

逆に、動物界で最も発達した脳であっても、それが障害されれば本来人間がもっている色々な機能に影響が出てきます。

脳に障害を与える原因には多くのものがありますが、私たちが目にすることが多いのが脳卒中です。そこでまず脳卒中のことを述べましょう。

脳卒中というと、脳が原因で卒倒する病気、というイメージがありますが、確かにこれは間違いではないのですが、実際には秒単位で倒れてしまう場合ばかりではありません。脳卒中の中で現在最も多いのは「脳血栓」ですが、これは2〜3日かけて「完成する」(*症状が全部出る)ことを「完成する」と呼びます。ことがしばしばあります。脳出血の場合はもう少し短時間で完成することが多いのですが、そ



「脳血栓」と「脳塞栓」のどちらも脳の血管が詰まって血流が途絶え、脳の組織が必要としている酸素やブドウ糖が供給されなくなるために脳の一部が死んでしまう状態です。

このような状態を「脳梗塞」と呼んでいいます。つまり、一口に脳梗塞と言ってもその中には脳血栓と脳塞栓の2種類があるわけですから、では同じ脳梗塞なのになぜ別々の名前が付けられているのでしょうか。それは脳の血管の詰まり方が、これら2つの病態で根本的に異なっているからなのです。

まず脳血栓について説明します。高齢になるにつれて誰にでも全身に「加齢性変化」というものが起こってきます。脳を養っている動脈もその例に漏れず加齢による変化が起こってきて、本来血液が淀みなく流れるように作られているのに、血液がスムーズに流れにくくなってきます。具体的には、血管の壁が厚くなって内腔が狭くなったり、血管の内側つまり血液に接している部分である「内膜」という膜があちこちで損傷してきてここに赤血球が付着したりするようになります。血液は血管の中を流れてこそ、その機能を果たせるのに、このように血流を妨げるものが存在すると血液はもうその血管を流れることができなくなり、そこから「脳梗塞」になってしまいます。この説明でもお分かりになるとおり、血管がふさがってしまうまでにはある程度の時間的余裕があります。これまでにお話したように症状の「完成」に時間がかかるわけです。

次に脳塞栓について説明します。脳塞栓というのは、別の場所から「かたまり」が血液の中を流れてきて血管を詰まらせる状態です。かたまりの多くは血が固まったものですが、それ以外の物である場合もあります。代表的なのが、「心房細動」という不整脈がある場合で、この不整脈がある方では心臓の中に血のかたまりができていくことがあります。そのかたまりの一部が血液の流れてきて脳に流れていくことによって流れてきて脳に詰まらせるのです。かたまりが大きい血管の中を流れている間はいいのですが、血管は次第に枝分かれして細くなっていきます。かたまりが通れないような細さになってくると、そ

「脳血栓」と「脳塞栓」のどちらも脳の血管が詰まって血流が途絶え、脳の組織が必要としている酸素やブドウ糖が供給されなくなるために脳の一部が死んでしまう状態です。

このように脳血栓と脳塞栓では起こり方がかなり違います。それにもなると、予防のしかたも異なってきます。脳血栓では血小板という血液を固める細胞の働きを抑えてやることで脳血栓を起さなくします。代表的な薬はアスピリン(あの解熱薬のアスピリン)です。実際に使われる量は、解熱薬として使われる量の3分の1くらいです。これに対して脳塞栓では心臓の中で血液がかたまりを作るのを予防する抗凝固薬としてワーファリンというお薬が使われてきました(最近少しずつ治療法が変わりつつあります)。いずれにしても、血栓の生成を予防するあまり、出血が起さずやすくなることは避けなければなりません。



医療法人啓仁会 平成の森・川島病院 (埼玉県川島町)
感染防御チームのラウンドを受けてみえてきたこと

当院は近隣の病院と連携を図り感染管理を行っています。他の病院が感染管理についてどのような方法で行っているか、また会議では同じチームで分析し感染対策で困難な事等について報告を行っています。

当院は医療療養型の病院で近隣の病院は急性期病院がほとんどなので、急性期病院と同等には出来ない事もありますが、感染に対する基本は同じなので他院の感染対策について学び知識の向上に努めています。

今回は埼玉医科大学医療センターの感染防御チーム(医師・薬剤師・検査技師感染管理認定看護師)の方が9月24日に感染に対する施設訪問(ラウンド)を行って頂き、標準予防策や手洗いの職員に対する指導方法・消毒薬の適正使用は現場で希釈して使用する際は「消毒薬〇〇ml・水〇〇ℓ・〇〇%」と表示・物品の管理を行う水回りから物品を避けて保管・現場導入されている医療材料を見直し製品を統一し無駄を省くことでコストを削減するなど細かく指導を頂きました。

当院でも感染チームが毎週各病棟を周り感染防御リストを使用しラウンドを行っています。自分達では気付かない事や見落とししていることなど指摘を受け今後の感染対策に繋がっていきたく思います。

4階病棟棟長 青木 郁子



指導前



指導後